

Editor's eye

・特集・

困ってしまう顔の皮疹

編集担当 馬場 直子

顔の皮膚症状はほかの部位に比べて数倍つらい。些細な症状でも患者さんのQOL低下につながり、外出や人前に出ることもはばかれ、さまざまな活動のモチベーションの低下につながる。今回はそのような「困ってしまう顔の皮疹」をテーマにしてみた。

頻度が高い痤瘡では近年外用薬の選択肢が増え、治療が格段に進歩した。しかし一方で難治例がなくなったわけではなく、瘢痕や色素異常で悩んでいる人もいる。冒頭の「治療 1」では海外も含めた痤瘡治療を巡る最新情報について書いていただいた。新たな作用機序の外用薬や、脂腺を標的としたレーザー治療まで米国では承認されているようである。酒皰も悩ましい顔の皮疹であるため、「統計」では東北大学における10年間340例の酒皰について解析していただいた。個々の患者の増悪因子や背景を把握してオーダーメイドの治療を目指すことの重要性が述べられている。「治療 2」では、外鼻皮膚癌切除後の再建について、多くの手術症例写真とともに、腫瘍の種類や顔における部位に応じた再建法の選択について概説していただいた。整容面と機能面を十分考慮した手術が、その後の生活の満足度とQOL向上につながる。

「臨床例」では、「小児の顔面に多発する播種状丘疹の3例」を取り上げたが、酒皰や顔面播種状粟粒性狼瘡との鑑別がむずかしく、小児の顔といえども皮膚生検を考慮すべきことが示されている。小児の顔面の慢性円板状エリテマトーデス (DLE) 症例では全身性エリテマトーデス (SLE) への移行に注意し、長期フォローすべきとのことである。また小児発症例が多い、疼痛や発赤腫脹を伴う光線過敏症状をみたら赤芽球性プロトポルフィリン症 (EPP) も疑って精査するが、既存の遺伝子変異がなくても不全型もあり、臨床症状も少し異なるとのことである。

眼囲の浮腫性病変としてはSweet病とMorbihan病、口唇の腫脹では形質細胞性口唇炎の2症例を提示いただいた。感染症では頬に生じたアスペルギルスやカンジダ、放線菌症などの真菌症、口腔内細菌による外歯瘻、帯状疱疹後のtrigeminal trophic syndromeなども取り上げたが、いずれも忘れてはならない疾患である。さらに見逃してはならない腫瘍性病変としてエクリン血管過誤腫、毛包脂腺系腫瘍と内臓悪性腫瘍を合併する遺伝性のMuir-Torre症候群、lymphoepithelioma-like carcinoma of the skinなどを取り上げてみた。

どの症例も患者のみならず医師も「困ってしまう顔の皮疹」なので、ぜひ本特集を読んで診療のヒントにしていただければ幸いである。